



中国朝鮮族社会の文化的特徴と発展の方向（「多国家(分散・分断)民族における内なる民族関係」プロジェクト）

著者	金 強一
雑誌名	東西南北
巻	2004
ページ	163-167
発行年	2004-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00002971/

「多国家（分散・分断）民族における内なる民族関係」プロジェクト◎

中国朝鮮族社会の文化的特徴と発展の方向

金 強 一 ・ 中国延边大学

一 「辺縁文化」[＊]としての中国朝鮮族社会の文化

(一) 「辺縁文化」と中国朝鮮族社会の文化の特徴

百年余の歴史のなかで、中国朝鮮族（以下「朝鮮族」と略す）社会は貴重な文化資源を形成してきた。つまり、朝鮮族社会は朝鮮半島の文化を元にし、その基盤のうえに積極的に中国文化を受け入れて「辺縁文化」体系を形成したのである。これは、従来の中国及び朝鮮半島では見られない新しい文化体系である。

辺縁文化とは、「元文化」（基盤になる文化）と「依附」（依存、附着）文化の性質を同時にもっており、また二つ以上の文化体系の融合で形成された複合的な文化体系をさす。朝鮮族社会の文化は、性格的には朝鮮半島の元文化と中国文化の融合でできた典型的な辺縁文化系統を形成しており、地政学的には二つの文化系統の交差点で両者を連繫しているが故に、強い辺縁文化の区域機能を所有している。

辺縁文化区域は、二つ以上の文化体系の交差点付近で形成さ

れるのが一般的である。このような文化体系は、二つ以上の文化環境のなかで長期間の進化過程を経たうえで、文化の融合を成し遂げており、言語、生活慣習、思考方式、価値観などの面で文化の複合的性格を強く示している。要するに、朝鮮族社会の文化は、朝鮮半島文化と中国文化の単純な集合ではなく、新しい文化体系であると言える。

(二) 辺縁文化の三つの機能

辺縁文化体系は、文化の転換、文化の仲介、文化の創造などの機能を有するため、性質の異なる各文化体系の交流において特殊な役割を果たしている。辺縁文化体系の文化機能には以下の三つの側面がある。まず、二つ以上の文化体系に対する理解が深いため、その文化精神が客観的に判読できる。したがって、その文化の優れた面をもって新しい文化体系を形成することができる。次に、二つ以上の文化体系の発展の推移を敏感に突き止め、文化誤読のような「色眼鏡効果」を最小限に止め、文化

交流の効果を最大化することができる。最後に、最も速い時間内に二つ以上の文化圏の情報を、互いに受け入れられる文化的信号で正確に伝達することができる。

情報化時代において、このような文化転換の機能は文化、経済、政治的交流の効果を最大化することによって、その文化系統自体の文化資源を形成している。朝鮮族社会は典型的な辺縁文化系統として、こうした独自の文化機能と貴重な文化資源を有している。朝鮮族社会のこのような辺縁文化の性格は、中国と朝鮮半島の交流において特殊な文化資源を提供しており、それが故に中国と朝鮮半島で重要な戦略的意味をもっている。

(三) 朝鮮族社会の辺縁文化機能の最大化

朝鮮族社会の辺縁文化的性格の合理性は、文化の主体性を確保すると同時に、文化機能の最大化とも言える。朝鮮族社会の一部では朝鮮族社会は中国文化の影響を受けた結果、(朝鮮半島文化との間の)文化の異質化の現象が深刻になっていると考えられている。わたしは、このような文化の異質化は文化の主体性の確保において必然のものであり、朝鮮族社会の文化の合理性はその辺縁文化の性格にあると考えている。

朝鮮族社会の文化的価値は、それが中国文化とも朝鮮半島文化とも異なる相対的に独立した文化体系をもっていることにあり。もし、朝鮮族社会の文化が性格の面において朝鮮半島文化に傾いたり、中国文化に傾いたりすれば、その文化体系は特別な価値を喪失するだろう。朝鮮族社会の文化構造の最も合理的

な選択は、辺縁文化としての性格を最大化することにある。したがって、朝鮮族社会の「文化の異質化」に対する否定的な見方は論理的な根拠が乏しいと思われる。

二 東北アジアにおける朝鮮族社会の文化

(一) 中韓交流において

中国と朝鮮半島は急速な交流をなしているが、そこでは朝鮮族社会の役割が大きかった。中国と韓国は数十年にわたる体制と文化の断絶のため、相当の文化的異質性をもつようになった。にもかかわらず素早い交流ができた背景には、もっぱら文化の仲介になった二〇〇万人という朝鮮族社会がある。これまで、中韓交流における朝鮮族社会の役割は文化の仲介的側面で顕著に現れたが、その原因は朝鮮族社会の辺縁文化独自の性格が完全には形成されていなかったことにある。

朝鮮族社会の文化はその発展につれて、文化の仲介はもとより、文化の転換と文化の創出の機能もちえるので、中韓交流において非常に重要な地位を確立するとみられる。問題は、朝鮮族社会がこうした発展の方向を正しく認識し、社会全般の文化の発展戦略をどのような視角から構築すべきかにあるが、これに対して朝鮮族社会の指導層にはいまだに明確な認識が形成されていないようである。

(二) 北朝鮮の開放と朝鮮族社会

朝鮮族社会は、朝鮮半島の平和統一の過程においてかなり大

きな役割を果たし、貢献できる文化集団である。朝鮮族社会は、社会主義の文化と資本主義の文化の両方によく熟達しているため、将来の北朝鮮の改革・開放およびその発展においてもかなりの影響力を及ぼすと思われる。現に、北朝鮮の咸鏡南・北道、平安北道、慈江道、两江道などの国境地帯は朝鮮族の影響を受け、多くの変化を引き起こしている。朝鮮族社会は北朝鮮の住民が外部と接触できる唯一のサイトなので、朝鮮族の役割は非常に重要な意味をもっている。北朝鮮にとって最も適切な道が段階的に改革・開放を進めることであるとしたら、朝鮮族社会の戦略的価値を重視する必要がある。

(二) 東北アジア地域において

将来の中国の東北アジア戦略および韓国の中国進出において、朝鮮族社会の文化の性格は重要な役割を果たしえる。もし北朝鮮が改革・開放し、あるいは朝鮮半島が平和的に統一されると、朝鮮族社会の価値は一層浮上し、中国と韓国で重要な戦略的意味をもつようになるだろう。文化的性格からして、朝鮮族社会は中国と朝鮮半島双方の文化をよく理解しているばかりでなく、日本文化もよく知っている。

こうした文化的性格は、朝鮮族社会が将来の東北アジア地域で特殊な役割を果たしえることを示唆している。朝鮮半島の冷戦状態が続いているなか、東北アジア地域にはいまだに全面的な協力体制が形成されていない。もし朝鮮半島の冷戦状態が終わると、東北アジアの経済的協力体制の形成は現実性をもつよ

うになり、これによって朝鮮族社会はその文化的特徴をもって東北アジア地域で重要な地位を占めるだろう。

地理的に、朝鮮族社会の中心である延辺地域は東北アジア地域における経済の協力体制形成の核心部に位置しているため、その文化的機能は一層浮上するのである。したがって、将来における朝鮮族社会の発展方向を、東北アジア協力体制の形成に焦点を合わせる必要がある。

(四) 朝鮮族社会の戦略的価値への見直し

中国と韓国はその交流の拡大と朝鮮半島の統一という立場から、朝鮮族社会について再認識し、新たな戦略を提示する必要がある。特に韓国の場合、単純な血縁的な側面での交流はすでに多くの否定的問題点を露呈させているので、戦略的に朝鮮半島と朝鮮族社会の利益構図を提示し、朝鮮半島と朝鮮族社会の一層緊密な連帯関係を構築する必要がある。

三 朝鮮族社会の文化と朝鮮半島

もし、われわれが朝鮮族社会の発展の焦点を中国と朝鮮半島の交流、さらに東北アジア地域の協力体制の形成に合わせるとしたら、朝鮮族社会の将来の発展方向は辺縁文化体系の完壁化とその機能の最大化に設定すべきであろう。

第一に、朝鮮族社会の存続は朝鮮半島と関連しているため、辺縁文化の性格をもって朝鮮半島との絶えない交流を通じてこそその文化の主体性を確保することができる。もし、朝鮮半島

が強大でなければ、朝鮮族社会の（中国社会への一方的な）同化は時間の問題に過ぎない。しかし、逆に朝鮮半島が強大になると、朝鮮族社会の文化的地位が一層浮上されるので、民族の同化は心配する必要がない。発達した朝鮮半島を背景とするならば、朝鮮半島との絶えない交流のなかで、朝鮮族社会は存続できるのである。

第二に、朝鮮族社会の発展の方向は、中国と朝鮮半島の関係を指標として設定すべきである。中国の政治、文化、経済の中心から遠く離れた延辺地域が、いまだに未発達の状態に置かれている主な原因は北朝鮮の開鎖状態にある。朝鮮半島との交流を通じてこそ、朝鮮族社会の発展が円滑に進行できるという視点からして、朝鮮族社会は必ず中国と朝鮮半島との交流の中で行使できる特殊な文化機能を一段と確実に形成して行くべきである。つまり、朝鮮族の文化資源を大切にすると同時に、その文化機能を最大化すべきである。

四 「危機論」、「同化論」、「解体論」について

現在、朝鮮族社会では「危機論」、「同化論」、「解体論」が急速に広がっている。こうした危機に対する正しい認識が必要であり、また社会全般を正しい方向へ導かなければならない。朝鮮族社会が直面している危機は、実は伝統的な農耕社会が産業社会へ転換する際に伴う必然的な痛みであるとも考えられる。人口の移動と集居地の消失を理由に、多くの学者たちは朝鮮族社会が破綻の危機を迎えていると思っているが、筆者はこのよ

うな現象を開鎖的な農耕社会の崩壊を前提にした社会の再構築であると考えている。

つまり、朝鮮族社会が直面している問題を危機と見なすのではなく、新たな出発の機会として見るのがより客観的であると思われる。当然ながら、問題を放置したり、無視したりするわけにはいかない。今、一部の学者たちは集居地の消失を食い止め、朝鮮族社会の共同体が保存できる方策として民族主義的な教育を強調しているが、そうした方策は実を結ばないであろう。というのは、現代において、経済的原因で農耕社会の集居地が消失するのは必然的な現象であり、単純な民族精神でそれを阻止しようとする試み自体論理的根拠をもたないからである。

もとより、民族が存続する条件として朝鮮族社会の集居地の確保は重要であるが、その解決策の力点は現実に置き、それに立脚して追求されなければならない。わたしは、朝鮮族社会の集居地を確保できる唯一の方法は、世界各地に進出している朝鮮族が戻ってこられる吸引力を延辺地域が形成することにあると思っている。このような吸引力を形成するために、政府が明確な実践的方案を講じなければならない。延辺地域において、人材が吸収できる条件が整ったなら、朝鮮族社会の集居地が新たに形成できるだけでなく、延辺地域が抱えている最も大きな問題である人材不足問題も一挙に解決することができる。

ここで強調しなければならないことは、もし、北朝鮮の開鎖状態が継続されれば、朝鮮族社会も仕方なく半開鎖状態に置かれるということである。したがって、延辺地域の発展において

朝鮮半島情勢の影響は非常に大きいと考えられる。北朝鮮が改革・開放するか、あるいは朝鮮半島が平和的に統一されると、延辺を中心とした朝鮮族社会の文化および経済交流における価値が一層増大されるので、強力な吸引力の形成が可能となる。そのため、わたしは朝鮮族社会が、必ず朝鮮半島の統一過程に参加すべきであると主張している。これは、単純な民族主義的主張ではなく、朝鮮半島との利益構図を形成することで朝鮮族社会自体の発展を図る上で重要な意味をもつからである。（翻訳、許首重・一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

注

*1 ここでいう「辺縁」または「辺縁文化」などの概念は、報告者が独自に定義した概念であるが、当日の研究会ではその意味するところから「境界」「境界文化」などと言い替えることもできるのではないかと

いう意見が出された。

付記

この報告は、和光大学総合文化研究所プロジェクト「多国家（分散・分断）民族における内なる民族関係」主催の公開研究集会（二〇〇三年一月三一日）で行ったものである。

キム・カンイル 一九五六年中国吉林省延边朝鲜族自治州敦化县に生まれる。八二年に蘭州大学哲学学科を卒業し、同年から延辺大学に勤め、九六年に同大学政治学部教授・学部長に就任。九九年から同大学東北アジア国際政治研究所所長。二〇〇二年六月から一年間、静岡県立大学客員研究員。朝鮮半島問題、中国朝鮮族社会論専攻。

『中国朝鮮族社会の文化優勢と発展戦略』（朝鮮語、延辺人民出版社、二〇〇〇年）などの編著、また滞日時の論考として、「国際化した『脱北者』問題の争点と解決法」（『世界週報』二〇〇三年六月二四日）などがある。